戦後ユース・サブカルチャーズについて（２）：フーテン族からアンノン族へ[*]

難　　波　　功　　士[**]

【0】若者から「ヤング」へ

60年代に「青年」から「若者」への移行があり、さらに70年代には「ヤング」という呼称が台頭し、固有名詞としての＜若者文化＞――いわゆる団塊の世代を中心とした、大人ないし社会全体への異議申し立て、ないしはそこからの離脱を指向したさまざまな文化的実践――が、若者文化一般へと拡散する経緯については、別稿「「若者論」論」に委ねるが、本稿では60年代の＜若者文化＞の混沌の中から立ち現れた「フーテン族」と、70年代に＜若者文化＞の余韻の中から生まれ、女性を担い手としたユース・サブカルチャーズ（以下YSと略記）という点でも注目される「アンノン族」について検討を加えていきたい。

【1】＜若者文化＞状況とフーテン族

東京に集住する団塊

57年４月の東京都への転入者のうち、15～19才は約５万３千２百人――この年代の転出者数は約７千４百人にしか過ぎない――を数え、総転入者数の57.1％にあたる（舘，1961）[1]。また70年の東京都への流出入人口は、全体で１万１千人の入超でしかないにもかかわらず、15～19才では約14万６千人の超過を記録している（東洋経済新報社，1985）。これらの数字を一瞥しただけでも、団塊の世代――狭義には47～49年生れ、広義には46～50年生れ（天野，2001）――がティーンエイジをむかえた60年代、いかに多くの若者が、東京（特に都区部、多摩東部、神奈川の東京湾岸部）を目ざしたかが理解できよう（月刊アクロス編集室，1989；高橋，1995；倉沢・浅川，2004）。そして、彼・彼女たちが集ったのが「新宿」である。67年に国鉄新宿駅が１日平均乗降客で全国トップとなる賑わいをみせ、「地方から上京した若者たちにとって、シックすぎる銀座は入りにくく、すでに伝統の街となっていた浅草は疎遠で、渋谷は水増しされたようで物足りなく、池袋はヤクザが怖いと言われ、結局、気軽に安心して先端の文化・芸術に浸れる盛り場としては新宿以外になかった」（吉見，1987：281）。

日本のヒッピー・ムーヴメントに関わり続けた山田塊也によれば、

「ロックが爆発的に襲来する直前のぼくらは、ハービマンとかコルトレーンなどのレコードを、喫茶店に持ち込んで勝手に踊った。考えてみれば、その頃は寛大だったのだ。深夜喫店なんてのが新宿には何軒もあって、焼酎を持ち込んで議論したり、眠ったりしても文句も言われなかったんだから。／66年秋から67年春にかけて、新宿は文化的爛熟のピークに達し、最後の徒花を咲かせた。それは革命前夜を思わせるような妙な解放感と興奮に満ちていた」（山田，1990：39-40）。

66年には紀伊國屋ホールにて、大野一雄・土方巽などによる『性愛思徴学指南図絵・トマト』が、翌67年には紀伊國屋裏のジャズ喫茶ピットイ

---

[*]キーワード：ユース・サブカルチャー、フーテン族、アンノン族

[**]関西学院大学社会学部助教授

1）60年代高校への進学率は、60年57.7％→65年70.7％→70年82.1％と急上昇し、同じく大学・短大への進学率も10.3％→17.0％→23.6％に達している。在学者数で見ても、高校・高専で60年約324万人→65年510万人→70年428万人、大学・短大で約71万人→109万人→167万人と推移している（東洋経済新報社，1985）

ンで唐十郎率いる状況劇場の『ジョン・シルバー』が上演され[2]、夏には花園神社にて同じく『月笛お仙：義理人情いろはにほへと篇』のテント公演が始まり（渡辺，1997）、アートシアター新宿文化の地下では、アンダーグラウンド・フィルムの旗手足立正生作『銀河系』を柿落しとして、蠍座がオープンしている（足立，2003）。この年の８月８日には米軍航空機用のガソリンを満載した貨物列車が新宿駅構内で衝突・炎上するなど、騒然とした時代背景の中、ジャズ喫茶[3]・暗黒舞踏・前衛芸術・アングラ劇および映画といった舞台装置を得て、新宿（東口）は＜若者文化＞の、とりわけカウンター・カルチャー（対抗文化）の震源地としての陣容を整えていった[4]。

67年、フーテン族の夏

フーテン族の前史には、アメリカのビートニクスに影響をうけたビート族が存在した。45年に生まれ、高校時代郷里ではカミナリ族だった若者は、上京し日本大学芸術学部に入った頃を次のように回顧している[5]。

「ビート族っていうのは、もう少し上の世代、六〇年安保でくずれた連中が中心だったんだろうけど、まあ彼らのマネをしていたんだ。フーテンが出てきたのはもっと後だよ。／昼間から新宿のジャズ喫茶あたりにたむろしてね。初めのうちは「キーヨ」がほとんどだった。あそこへ行くとアーティストふうのやつがおおぜいいて芸術論のまねごとみたいなのをしゃべっていた。‥一年の途中で「キーヨ」がなくなって「風月堂」によくいくようになった。‥ところが、三年になるころから徐々に様子が違ってきた。街ではフーテンが出てきて理論派じゃなくなっちゃった。まわりにはだんだん学生運動の影響が強くなってきて、ビート族仲間でも山の中にこもっちゃうやつと政

2）同年５月には「ジョン・シルバー／新宿恋しや夜泣き編」として草月アートセンターでも上演され、横尾忠則のポスターが評判を呼んだ。一方、６月には新宿末広亭にて天井桟敷が「大山デブコの犯罪」（作：寺山修二、美術：横尾忠則、音楽：和田誠、演出：東由多加）を上演している。またこの年の暮れ、ハプニングアート集団「ゼロ次元」が、新宿西口で「焼身自殺芸術テロ儀式」を、東口で「防毒面全裸歩行儀式」を敢行している（2001年６月21日号『Quick Japan』「アートテロリスト講座」）。

3）「戦後の喫茶店数の推移を見ると、東京二十三区で五千店を超えるのは、ようやく東京オリンピック後の昭和四十一年（一九六六）のことにすぎず、戦前の水準にまで達するのに随分時間がかかったことがわかる。／しかし、そのわずか五年ほど後には一万店を超えているから、急激に喫茶店の数が増えたわけだ。‥このころから団塊世代が大学進学や就職などで、地方から東京に大量に流入してきたことも喫茶店の興隆に影響したに違いない。若者が喫茶店文化の担い手になったのだ。／この中で発展した喫茶店の一つの典型が、ジャズ喫茶だ。／いったい何店あったかわからないが、昔古本屋で見つけた『ジャズ日本列島・昭和五十一年版』には東京都内だけで百十一店のジャズ喫茶とジャズのライブハウスが掲載されている。／地域別に見ると、吉祥寺十六店、新宿十五店、渋谷十店、下北沢九店、高円寺七店、池袋五店、荻窪三店、国分寺二店など」（三浦，1997：101）。

4）カウンター・カルチャー（対抗文化）には、支配的文化に抗するもの全般を指す用法もあるが（奥村，1994など）、ここでは「日本の対抗文化は昭和四〇年代後半から五〇年代の前半にかけて、折からのベビーブームもあって都会に大集中した若者の世代体験を指すもの」（平野，1985：55）であり、特定の時代状況に関わるもの、すなわち「＜若者文化＞⊇対抗文化」として理解しておく。

5）ビート族にはファンキー族・ダンモ族などの異称ないし類似のYSが存在した（1997年『東京ストリート・スタイル展』図録参照）。中には睡眠薬遊びに耽り、ジャズ喫茶にたむろする者もおり、36年生まれの「元祖フーテン」は、「下宿を追われたぼくは、新聞紙を敷いて、何日も（新宿東口駅前で）夜を過ごすことになる。‥フーテン族はハイミナールやLSDを服用してラリっていたが、ぼくらの時代はアドルムとかブロバリンといった睡眠薬が自由に買えたので、それを飲んでもうろうとした気分を味わったものである」（河出書房新社編集部，1979：220）。以下ここでは、フーテンを放浪生活（者）の意の普通名詞として用い、フーテン族という場合は67年以降の数年間に新宿東口にたむろした人々を指す固有名詞としたい。永島慎二は言う。「当時のフーテンには３種類いましたね。風月堂をたまり場にしている“インテリフーテン”と、厚生年金会館近くにあったキーヨというジャズ喫茶にいた“モダンジャズフーテン”。それに歌舞伎町にいた東京に行けばなんとかなる、と地方からあてもなく上京してきた“ウスラバカフーテン”ってヤツらです」（1998年９月号『散歩の達人』）。この場合、これらはいずれも新宿にたむろし、放浪（ないしはそれに近い）生活をしていたという意味でフーテンではあるが、「ウスラバカフーテン」がフーテン族に近似し、前二者はそれぞれヒッピー族、ビート族に対応している。風月堂に関しては、2003年11月号『BURST』「60年代カウンターカルチャーと新宿「風月堂」」参照。

治運動に走るやつとの二つに分かれるようになったんだね」(河出書房新社編集部，1980：200-1)

このように、60年代初めから新宿の喫茶店などには、既成の価値観に背を向けた若者たちが集まり始めていた。67年４月から『COM』に連載の始った永島慎二のマンガ『フーテン』にしても、60年代前半の新宿を舞台に、マンガ家と「フーテン（族)」を名乗る若者たちとの交流を描いた作品であった[6)]。

その67年夏、新宿東口の緑地帯――フーテン用語では「グリーン・ハウス」――に若者たちが、日がな一日何をするわけでもなくたむろを始め、フーテン族なる「珍風俗」として取り沙汰されていった。そのファッションは、一般に「何日も洗っていないような汚れたＴシャツ、 ジーパン、そして素足にサンダルを履き、それになぜかショルダーバッグをさげていた。髪は服と同じように何日も洗わず櫛さえ通していないような長髪（ナポレオンカットとも呼ばれていた）に、無精髭が基本。‥髪が肩より下まで伸びているものも少なかった」(アクロス編集室，1995：116)。先行するYSと比べると、その徹底したドレスダウンによって異彩を放っていたわけだ。だが多くの論者が指摘するとおり（馬渕，1989など)、フーテン族は「ヒッピー族」「フーゲツ族」「サイケ族」「アングラ族」「長髪族」といった異称ないしは近しい呼称を持ち、その像は一定せず、他のYSとの線引きは、その主義主張においても、その風体においても不鮮明かつ流動的であった[7)]。「フーテンは志願すれば誰でもなれる。ベトコン・シューズに地下鉄工事のヘルメットを被った勇ましいフーテンもいる。玉なしメガネをかけ、そのめがねの先にボール紙の望遠鏡をつけた奇怪ないでたちもいる。モヒカン狩りもいれば、ビートルズ・カットもいる。それなりにお洒落なのだ。／が、ようは心である。物憂げに芝生に転がり、二、三日も彼らと生活をともにすれば心はいよいよフーテン的になり、結構あだ名もつき、薄汚いフーテンとして通用するであろう」(67年９月17日号『アサヒ芸能』「女に寄生する“青春コジキ”の24時：潜入ルポフーテン族・東京新宿に群がる人目をはばからぬ300人」)。

その奇抜な外見とともに、シンナーの吸引などもあって、フーテン族はすぐさまモラルパニック視されていくことになる。先行した原宿族の時と同様、テレビ・週刊誌・新聞が若干のタイムラグを持ちつつも、ほぼ足並みそろえてフーテン族の生態を取り上げていった。まずテレビでは、７月18日の『おはようにっぽん』(TBS朝８時）のティーチイン「若者はダメか」においてフーテン族が画面に登場し（７月20日付朝日新聞)、８月20日には「TBS朝11時半の「新宿フーテン族」、12チャンネル夜10時半の「無着先生フーテン族と語る」、それにフジ夜10時15分「スター千一夜」のフーテン娘と大島渚氏の登場。――フーテンのいい分はバラバラだが、共通しているのは仕事ぎらいにフリーセックス、権威の否定などか」（８月22日付朝日新聞）と同日に三番組において取り上げられている。また８月28日「「マスコミQ（TBSテレビ、夜11時25分)」は、「何かになりたい」と題して、フーテン娘その他数人の十代の女性に「自分自身のための広告」をやらせていた」（８月30日付朝日新聞）という。

一方週刊誌は、８月14日号『週刊文春』「新宿フーテン族の東大生」、８月18日号『週刊朝日』

---

6) 65年４月25日付朝日新聞「百人余りを補導　銀座の“コウモリ族”狩り　築地署」によれば、「みゆき族に変わって最近、銀座をカッポし始めたのが、細いコウモリを持った少年たちで、人呼んで「コウモリ族」。‥このスタイル、「レーンコート族」「ゾウリ族」「みゆき族」「フーテン族」に次いで五番目の銀座の十代風俗」とある。この銀座「フーテン族」ないし「フーテン部隊」(1965年３月22日号『週刊サンケイ』「ショック！銀座サーキット：“ナンパ”を狙うマッハ族とフーテン部隊）は、みゆき族が抱えていた「フーテンバッグ」に由来し、その後継と推測される（難波，2004)。また同日の記事に「京橋公会堂の“非行パーティー”　札つき少年が主催　ムッとする狂態　視察の関係者びっくり」とあり、60年代中盤までは青少年非行文化の拠点は、依然東京の下町側にあったことがわかる（松本，1978)。

7) フーテン族とヒッピー族とに関して言えば、「どちらがより汚いかといえばやはりフーテンに軍配が上がる。‥フーテンはマリファナやシンナーを愛好したが、ヒッピーはマリファナ吸引だけ」(馬渕，1989：178)、「思想がないのがフーテン、思想があるのがヒッピーともいわれた。‥ヒッピーはゴーゴーを踊らなかった」(アクロス編集部，1995：117-8）といった区別があった。

「風俗ルポ　新宿フーテン昆虫記」などの特集記事を組み、後者では「この一月から半年間に四谷署が補導した件数は、無断外泊　三三七、家出二三八、盛り場ハイ回二二〇、不健全娯楽八一、睡眠薬二三、ほか計一一四五。場所は大部分が新宿である。昨年同期は五七一件だから、ほぼ倍増している。‥権力主義的な束縛を拒否しては、今の社会に生きてゆけないし、他の集団と事を構えることなしでもやっていけないのだ。こういうことが徹底的に嫌いなものははじきとばされる。それがフーテンであると見る。そこで彼らのグリーン・ハウスでは、完全なボスのいない、集団のまとまりの極めてゆるやかな社会ができた。若干の自衛と、ドロボウをしないなどの、必要最小限の秩序とモラルしかない」と報じられている

同様に女性週刊誌も、8月21日号『女性自身』「“フーテン”するってどんなこと？：モダンジャズと睡眠薬とセックスにくるった若者たちの素顔」といった記事において、

「抱き合っていた二人は、男の子がJJ（19・大学生)、女子がフーセン（17)。／JJは原宿、六本木を遊びまわり、フーテン仲間に入った。喫茶店のボーイをしている。フーテン仲間に入ったのは、女の子にナンパ（小づかいをせびられたり食事をおごらされること）をされたのがキッカケである。二人とも、友人のパート（アパート）や親戚の家を泊まり歩いて、フーテンする（外泊する。放浪する）生活を続けている。‥深夜喫茶で踊ったり、ラリったりして一夜をすごしたフーテンたちは、夜がほのじろんでくるころ、新宿駅東口に集まってくる。‥午前10時。デパートが開店すると、屋上にあがり、ベンチでひとねむり。‥男の子も女の子も、グループの一員なら、食べものやお金を分けあって助けあうという暗黙のルールがある。しかし、がいしていうと、女の子が喫茶店なんかで一週間働いた収入を、仲間の男の子にわけてやることが多い。男が働いて女性に食わせる普通の社会と逆になるんだそうだ。‥セックス、ゴーゴー、それに睡眠薬は、フーテンの“三種の神器”といわれている。‥睡眠薬は、ハイミナールが主で、それが手に入らないときは、ナロン(生理日を変える薬)、アトラキシン（鎮静剤)、ドロラン（鎮痛剤)、目薬などをつかう」

と、その性的役割の転倒や放恣、薬物の使用を非難している。

こうした騒ぎは夏だけにはとどまらず、9月1日朝、淀橋署と新宿駅によって緑地帯に「立入り禁止」の表示が立てられたが、10日未明にはフーテン族と野次馬500人によって引き抜きれ、派出所が投石されるなどの混乱が続いた（9月11日付朝日新聞)[8)]。

フーテン族とは

では、このフーテン族とはどのようなバックグラウンドを持つ若者たちだったのだろうか。67年9月21日号『週刊大衆』「狂える若者“フーテン乞食”の行方：秋風の中で聞いた明日からの生きる道」によれば、「フーテン族の主力は、夏休みでヒマになったイカレた学生たち、という見方に従って、七月二十四日から八月二十八日までに淀橋署に保護された未成年者の数を見れば、男五十人、女三十三人。／その内訳は中学生二十八人、無職四十五人、十人はレッキとした職業がある。／さらに同署から警視庁に報告した『フーテン族に関する報告書』の抜粋――。／△フーテン族の種類＝①十六歳から二十三歳ぐらいまでの家出学生、無職者がインテリぶってブラブラしながら、自由を愛し、誰にも束縛されない生活を望んで、フーテンであることを誇りとしているもの。／②昼間は工員、ボーイ、バーテン、ウエイトレスなど一定の職業がありながら、夜になるとグリーン・ハウスや深夜スナックなどにたむろしている者。／③成人のいわゆる風太郎と、飲みすぎて終電に遅れた者」と、その属性は多種多様であり、中には名古屋出身で大塚の予備校に通っているという大学浪人フーテンや、その彼女である「家は原宿の商店で、東洋英和を品行不良で退学、目下は、午前中は服飾デザインの学校に通っているブ

8）67年10月23日号『平凡パンチ』「新宿モグラ族　健在だったフーテンたち」には、「『グリーンハウス』ぎわの階段をおりると、駅ビル地下の通路。壁画のある一画が芸術的感興をもよおすのかどうか、彼らのお気に入りの巣。常時、二～三十人くらい集まっており、フーテン少女の姿も目だつ」とある。

ル（ジョア）の娘（16才）」などもいるという[9]。

大島渚の映画『無理心中日本の夏』（配給・松竹）の主役に抜擢されたフーテン娘にしても、「家庭環境はけっして悪くない。父親は新潟県長岡市の大きな紙問屋の専務。四人きょうだいの末っ子で、上の三人はすでに結婚して独立。彼女は私立十文字高校を二年で中退後、青山の高級洋装店でお針子見習いをしたり、姉の経営する洋装店を手伝ったりしながら「父の送金をうけてフラフラして」いるうちに大島作品の主役にスカウトされたしだい」（67年9月7日号『週刊現代』「フーテン族から村八分にされた桜井啓子」）。また、68年1月13日号『週刊新潮』「頓死したフーテン女生徒：17歳の少女がウイスキーのラッパ飲み」には、「経済的にさして不安がある家庭ではない。父親は、港区の電機会社の倉庫課長。‥高校生になってからは、ジャズ、ゴーゴー、睡眠薬に熱中するようになる」とある。総じて「社会的には、中産階級の子弟が多い。彼らが一番きらいなのは、マイホーム主義」（深作，1968：128）であり、68年11月6日付朝日新聞によれば「フーテンの家庭環境は多くの場合、地方の中流に属して」いた。

だが、その一方で68年には、「新宿に暴力フーテン　四人組、ナイフでおどし」「新宿周辺のフーテン族の犯罪は、このところ目だって増え、淀橋署で今年逮捕したのは十三人。空き巣、置き引き、恐喝など百三十一件の悪事を働いていた。‥このほか、組織暴力団に食べさせてもらい、その手先となって働いているフーテンも」（5月14日付朝日新聞）といった記事が多くなってくる。6月17日付朝日新聞によれば、新宿のフーテンには「本格派」「通勤フーテン」「観光フーテン」などがおり、通勤組・観光組の中には、遊ぶ金や帰りの電車賃などに困ってゆすりたかりを働いたり、美人局まがいの行為に及ぶ者も見られるという[10]。

68年のフーテン族が67年のそれと異なるのは、前年夏の騒ぎをマスメディアによって知っていた点であろう[11]。68年10月18日にニッポン放送をキー局としてオンエアされたラジオ番組『ザ・パンチ・ジャーナル』――新宿東口駅前広場を見下ろすサンヨー電化センター内のスペースで50人ほどの若者を集めたティーチインの様子を夜7時から8時台に放送。三洋電機をスポンサーとし、『平凡パンチ』誌の協力を得ていた――では、「新宿って街はマスコミがつくったんだと思います。去年の夏フーテンとか、どうのこうのって騒いだでしょ。その前にもフーテン族みたいなのはいたと思うんです。マスコミが騒がなければ一般の人もあまりわかんなかった。騒ぐのであたしもぼくもっていろいろ出てきたと思うんです」（内田，1969：22）といった発言がなされている。

またフーテンの定義に関しては、

「男2　フーテンとはどういう意味ですか？」
「女1　それはまぁ、一定の職業につかないでね、食べたいときに食べて、ねたいときにねる、セックスしたときにセックスする、そういうんじゃないかしら、よくわからないけど。でもあれだってマスコミがうみ出した言葉でしょ、それにつれて、いわゆるフーテンっていうものがふえてき

9）68年7月20日号『週刊新潮』「三菱重工副社長の意外な御曹司：財界エリートと新宿フーテンエリート」によれば、後にピース缶爆弾事件の犯人と名乗り出る牧田吉明は、68年夏にフーテンの集会を企画し、カンパを募っておきながら当日雲隠れするなどの騒ぎを起こしている。

10）「彼らの生活費・遊興費の出所であるが、たとえばトムは、「休みがちだが街工場で働いている」。また、たとえばヨッタンは「金は天下のまわりもの。よほど窮したときは、私設職安へゆく」。私設職安とは、つまり手配師のことで、そこへ行けば日雇い労務者の仕事の口にありつけるそうだ。このヨッタンの言によれば、ときには、「グループの女性構成員中もっとも美人の者が、見るからに好色そうで、かつ金のありそうな中年男をハントする。そして、何でもいうことを肯（き）くから、お小遣いちょうだいよ、とネダる。首尾よく金を出させることに成功したら、隙を見て仲間のところへ逃げ帰って、みんなと分配する」――といったことも行なわれる」（69年7月号『文藝春秋』「性風俗最前線・新宿を行く」）。

11）67年9月15日号『週刊読売』「大宅グループ日本考察<37>　本格派フーテン族いでよ！」によれば、「彼らはおしなべて、異様なくらい饒舌であった。それはべつに「ハイチャン」（ハイミナール）や、ドロランという睡眠薬のせいではなかった。‥ぼくがマスコミからの使者である、という理由だけで‥‥。／他人指向型のフーテン、マスコミに色目を使う本格派（？）そこにはまさしく、やりきれないほどに十把ヒトカラゲの月並みな現代ッ子の顔がのぞいていた」という。

た」「男２　たとえばアパート借りていても、フーテンはフーテンであるわけ？」「女４　そうそう、だからお風呂に入ってもフーテンはフーテンなの」‥「女１　テレビなんかでフーテンみて、ちょっとやろうかなんてのがふえたのよね、そんなことでフーテン始めたりする学生が多いわけよね。で、純粋なフーテンっていうのは、その、社会に利用されたくない、利用したくない、そういう意味でなにもやらない。だから純粋なフーテン、それでその目的ってのは、何もやらないってことじゃないんですか」（内田，1969：43-5）

といった議論が交わされている。結局、「そもそもフーテンとは何か」が議論されなければならないほどに、本来東口駅前広場をねぐらとし、ひたすら無為を追求していただけのフーテン族は、世間の耳目を集め、警察によって本拠を奪われていく中で当初の意味合いが薄れていき、さらに海外のヒッピー・ムーヴメント[12]や反戦運動、アンダーグラウンドないしアヴァンギャルドなアートシーンなどと交錯することで、その輪郭を失っていった。68年10月28日号『平凡パンチ』「若者のための『派閥』案内」では、フーテン内のさまざまな分派が紹介されている。本格派フーテン・名士的フーテン（初期からの有名フーテンである「ガリバー」など）やシンナー・フーテン以外にも、より政治的・思想的なオキナワ・フーテン[13]、マスコミ派フーテン（宮井陸郎など新宿アングラ文化の代弁者・解説者としてマスメディアに多く登場）、イラスト・フーテン（セツ・モード・セミナーの学生など）、タブロー・フーテン（似顔絵描き）、詩人フーテン、風俗フーテン、オネエ・フーテン、ジジイ・フーテン、オマワリ・フーテン（私服警官）、外人フーテンなどが挙げられている。こうした転用に次ぐ転用の中で、固有名としての「（新宿）フーテン族」は消散していき、フーテンという語は、69年に始る映画「男はつらいよ」シリーズの中にのみ生き残ることになる。

拡散する＜若者文化＞

まず日本にヒッピー・ムーヴメントを紹介したのは、60年代に族生した若者向け男性週刊誌であり、中でも『平凡パンチ』誌は一貫して、新宿フーテン族は無思想・無節操であると批判し、その一方で「和製ヒッピー族」を称揚し続けた（マガジンハウス，1985）[14]。だがその和製ヒッピー族たちも、やがて辺境へと隠遁していき、社会的な影響力を失っていく（山田，1990）。後に残ったのは、ヒッピー・ムーヴメントをビジネスへと繋げた少数の起業家とアーティストたちだけであった（浜野，1974）[15]。68年10月21日の国際反戦デーに新宿駅を占拠した過激派や翌年春に新宿

12）67年のヒッピー関連の新聞記事は、ほとんどが海外の動向の紹介であり、ヒッピーという呼称は基本的に外国人に対して与えられていた。68年に入り、ようやく日本のヒッピー・ムーヴメントが紹介され始める。

13）68年９月16日号『週刊サンケイ』「東大の“寝首”をかいた新宿ヒッピー」によれば、「八月二十四日午後七時。安田講堂近くの四か所からいっせいに火の手があがった。Ｇパンに黒ヘルメットの若者、ハデなサイケ模様で彩色したヘルメット、フーテンふうの女、芸術家を気取った長髪のヒッピー族などが約三十人。ワイワイいいながら紙クズや棒ぎれでタキ火を始めたのだ」という事件が起きている。一方、68年５月31日付朝日新聞には「フーテン族、米軍王子病院に投石」とあり、反戦運動に参加する者もいたようだ。

14）「一九六四、五年頃、『平凡パンチ』誌はよく“アンチ・エスタブリッシュメント”という言葉を使っていたし、その頃『平凡パンチ』誌と対抗していた『Ｆ６セブン』誌は、若い批評家やジャーナリストを起用して“反体制的な思想・行動”という続きものをのせていた」（赤塚，1969：15）。現に67年８月21日号『平凡パンチ』「東京ヒッピー族」では、東口広場にたむろする人々は「大別すると三つのグループに分かれる。浮浪者の集団、新宿フーテン族、そして和製ヒッピーと呼ばれる集団。／浮浪者は中年、フーテン族はいわゆるガキ、和製ヒッピーは青年層といったところだ。‥彼たち、和製ヒッピー族には、大学に籍をおいている者が多い。東大、一橋、早稲田、法政、明治、遠くは京大、北大にまで及んでいるのにはおどろいた」と報じ、翌週の８月28日号『平凡パンチ』では「日本に生まれたヒッピーの本拠地　バムアシュラム富士見センター」といった動きも紹介している。

15）新宿のサイケデリック・ショップ“ジ・アップル”や日本最初のディスコとされる赤坂の“MUGEN”をプロデュースした浜野安宏など。浜野によれば、「奇装族」という若手文化人による「マチ行動―歩く、買う、あつまる‥‥」や店舗展開によって、「ロングヘアーもハレンチも普通になった。マチが若者に対して寛容になって、マチが若者を指向し始めた」という（浜野，1974：290）。この奇装族は、それまで若者への他称でしかな

西口広場を占拠したフォークゲリラもやがて姿を消し、69年の「タカノ新装オープンの日は新宿が街をあげて協力、協賛し、街中にタカノの提灯がともされたが、それは社会的問題児の集団だったフーテン族のイメージを新宿から消し去ろうという街ぐるみの態勢であった」（楠，1989：236）。70年夏には「歩行者天国」が出現し、新宿は、この年の暮れ植草甚一に「少し頭をはたらかさないぶんには、新宿に出たって面白いことにはブツからないんじゃないかな。きのう昼間から夕刻にかけてブラついたとき、そんな印象をうけた。二年まえだったら、むこうから体当たりしてくるような雑多なムードがあったし、どっちの方向へ行くのが利口だろうかと、歩きながら押され気味になったり、うわっ調子になったものだが、そんなところが、まず違ってきた」「新宿は異端文化の原型を生んだが、みんな横取りされちゃったね。それにしても若い者に対して薄情な街になったなあ」と回顧される街となっていったのである[16]。

67年８月３日付朝日新聞の「論争」コーナーにおいて、大島渚がフーテン族支持の立場から「造反有理」を説くのに対し、反対派無着成恭は、「青年の自覚なし」と一蹴している。無着によれば、「青年」とは「人間の労働と、人間の社会を愛する真に人間らしい人間」へと成長すべき者であり、「この日本を、どのような方向へ導いていくことになるのかという役割の自覚」を持つ者であるという。明日の国家や社会を担う有為の成人へと社会化されるべき青年期を疑わない無着にとって、既存の社会的常識や労働・生産に背を向け、時にそれを破壊し、刹那に生き、成熟を拒否し、土俗的なものへの回帰を試みたりもするこの頃の＜若者文化＞は、到底受け容れることのできないものであった。そして、それまでの青年像を覆す多くの＜若者文化＞の実践の中でも、フーテン族は「貧しい有閑階級」という逆説と、当時の常識的なジェンダー観の転倒において際立った存在であった[17]。それはやがて70年代に入ると、「ヤング」たちのライフスタイルへと希釈されていき、かつて東京へ、新宿へ、街頭へと集中していた若者たち（の視線）は、雑誌のグラビアやそこに描かれた「地方」へと散逸していくことになる。

【２】旅するアイデンティティ、アンノン族

急成長する雑誌メディア

フーテン族以前のYSが、東京（近郊）在住者によるものだったのに対し、フーテン族は上京者を多く含み、さらにここで取り上げる「アンノン族」は、70年創刊の『an・an』（平凡出版、現マガジンハウス）と71年創刊の『non・no』（集英社）といった雑誌メディアに由来するYSである以上、当然多くの地方在住者を巻き込んでいた。それまで多くのYSにとってマスメディアは、それらを非難し、その成員をあるステレオタイプに仕立てていく装置であったのに対し、アンノン族はマスメディアの介在を前提とするYSであったのだ[18]。

もちろん『an・an』『non・no』以前にも、少女向けや主婦向け以外に、若い女性を対象とした雑誌は発行されていた。「『婦人画報』と女性の週刊雑誌との中間をゆくような講談社の『若い女性』」は、55年に創刊され、「毎号スタイルブック等の付録をつけ、特集記事には職業、結婚、恋愛等をもって女性間に人気を得ている。部数も20万

かった「族」を、自らにレイベリングし、仕掛けていった事例として注目に値する（君塚，2004）。こうした流れの中で、有名フーテン族であったガリバーは、ファッション・ショウのモデルに起用され（佐藤，1997）、「ヒッピー運動」も一種の風俗と化していった（砂田，1975）。

16）70年12月６～８日付『朝日新聞』「新宿・ジャズ・若者：異端文化をさぐる」より。72年12月18日号『平凡パンチ』「副都心計画の次は新都心化計画：若者の街・新宿が策す《ヤング追放作戦》にメス！！」によれば、高級化や女性客の誘致をはかる商店会によってジェントリフィケーションが進み、来街者の年齢層も、その中心は十代後半から二十代前半へと移っていった。

17）またメディアの面に関して言えば、新奇な自前のメディアやスペースを持ったヒッピー（ミニコミ紙・誌や風月堂など）やアングラ族（演劇・舞踏・映画など）、フォークゲリラたちに比べ、フーテン族はマスコミに取材される対象に止まり続けた（森，1969；岩田，1981）。

18）戦後日本社会における雑誌を介したYSの先行事例としては、「「平凡」族を分析する」（1953年６月１日付学園新聞（No. 698，京都大学新聞社））に見られるような、「平凡族」など。

表１．“いつも読む週刊雑誌”の年次別表（数字は順位）

	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78
週刊朝日	1	2	2	3	3	2	1	1	3	4	2	5	4	2	4	1	1	1
週刊新潮	5	5	5	5	4	4	4	4	2	1	4	2	3	4	1	2	2	2
週刊現代	11	12	11	14	13	9	7	7	5	5	6	6	6	6	5	5	3	3
女性自身	3	3	3	1	1	3	3	2	1	1	1	1	1	1	2	4	4	4
サンデー毎日	2	1	1	2	2	1	2	3	3	3	3	3	2	3	3	3	4	5
週刊平凡	4	4	4	4	5	5	5	5	7	6	5	4	5	5	7	7	8	6
週刊ポスト										17	7	8	12	7	6	6	6	7
週刊明星	9	7	7	7	7	7	6	8	10	10	8	10	10	8	9	8	9	8
週刊文春	6	6	6	6	6	6	8	6	6	8	10	7	7	9	8	9	7	9
non・no													**19**	**17**	**13**	**11**	**10**	**10**
プレイボーイ							17	16	17	19	20	16	16	18	21	19	14	11
週刊女性	8	8	8	9	10	10	12	11	8	11	11	11	10	12	11	11	11	12
女性セブン			13	11	12	14	14	10	11	7	8	8	8	10	10	10	12	13
少年ジャンプ													18	23	17	16	17	14
少年マガジン						24			18	13	16		20	14	15	14	13	15
セブンティーン								18	24	18	18			20	19	20	16	16
少年チャンピオン													40	32	23	23	19	17
an・an														**21**	**20**	**18**	**20**	**18**
平凡パンチ				15	11	12	11	14	14	15	17	14	13	13	17	22	22	18
週刊読売	7	9	9	10	8	8	10	13	12	12	14	13	14	15	16	15	15	20
朝日ジャーナル	14	13	14	13	15	15	13	12	13	15	13	16	17	22	22	24	26	25
ヤングレディ				**8**	**9**	**11**	**9**	**9**	**9**	**9**	**12**	**12**	**8**	**11**	**12**	**13**	**24**	**28**

毎日新聞社『読書世論調査』より作成

台以上の伸び方である。／小学館が『婦人公論』のジュニア版と称して60年１月号で創刊した『マドモアゼル』はまだ未知数であるが、若い女性がどのような受け方をするかに問題があるようだ」（出版ニュース社，1960：110)。また63年には、『女性セブン』（小学館）や『ヤングレディ』（講談社）も創刊されている。

だが、こうした婦人誌の年少版としての「ミス誌」や、洋裁のノウハウやパリコレなどハイファッションのみを伝えてきた服飾雑誌とは一線を画し、今日まで続く若い女性向け雑誌ブームの嚆矢となったのは、やはり『an・an』であり、『non・no』であった（表１参照)。特に創刊当初の『an・an』は、海外ロケによる記事や斬新なデザインが評判を呼び、「平凡出版がパリの『エル』と提携して創刊したこの雑誌は、日本人のヨーロッパへの憧れに決定的な方向付けを行った。デザイナーとしての堀内誠一の意義は、ゴタールやフーコーが決して出来ない形で、日本人のフランス観に無意識的な枠組を与えた。60年代の終わりにしきりに唱えられていた、土俗的なるものへの回帰や、われらが内なる日常性の解体といった標語は、こうした趨勢のもとにしだいに色褪せ、文化流行から取り残されたものへと転じていった。何か別のものが台頭しようとしているという直感を、わたしは強くもった」（四方田，2004：194）と、今日においても伝説として語り続けられている。

しかし、その誌面の先進性が、すぐに売り上げに結びつくことはなかった。「当初は、一般公募による奇抜な誌名もさることながら、横文字のレイアウトがやたらに出てきたり、パリ・モードがそのまま日本の飛行場に降り立った感じで、その場違いな誌面に、日本の読者は戸まどいを覚えた

のかも知れず、売行きもあまり芳しくなったようだ。それが、次第に平凡独自のオリジナル編集を加味して軌道にのせ、号を追って読者を増やしていったのはさすがである。モデルを単に“着るモデル”としてとらえず、溌剌とした“行動するファッション・モデル”として生活の中に描いたことが、都会的な若い女性のフィーリングにミートした、ともいえよう」(出版ニュース社，1971：84)。

そして72年から始った旅特集が、『an・an』『non・no』を完全に軌道に乗せることになる[19]。

「カニ族」から「アンノン族」へ

アンノン族の前史として注目すべきは「カニ族」の存在である。67年８月７日付朝日新聞によれば、「カニ族――幅の広いリュックサックをかついでいるため、狭い列車内をカニのように横になって歩くためつけられた。国鉄がさる三十一年、道内ならどこでも、何度でも乗れる便利な「北海道均一周遊券」を発売してから現れはじめた。‥札幌駅では午後十一時四十五分の最終列車が着いたあとは、降車口付近のコンクリートのタタキに寝袋や毛布をひろげて寝込む学生が多いときで四、五十人、旭川七、八十人、函館、網走二、三十人、といった具合で、なかには女性もいる」。海外でのヒッピー・ムーヴメントやバックパッカーたちの登場と同時に、ないしはそれらに先行するかたちで、日本においても北海道を中心に放浪する若者たちの姿が目立ち始めていた（新井，2000)[20]。このカニ族は、男性中心のYSであったが、51年生れの女性の回顧に、「大学時代、カニ族といわれ、ザックをしょってラフな服装で、アルバイトをしては、日本各地を旅行していた私は、卒業して勤めはじめても放浪癖がやまず、ヒマさえあればごらんの通りになってしまいます。「アンノン族」が私と同世代の人が多いわけですが、彼女たちの豪華な旅行とは違って、私の旅行は質素倹約軽快をモットーにしています」（河出書房新社編集部，1981：235）とあるように、70年代には女性のカニ族も珍しくはなくなってきていた。

だが、やはり若い女性の旅の主流は、アンノン族として括られた、女性誌に触発された旅行のスタイル[21]――72年２月20日号『an・an』の「日本の旅：アンアン流『旅行けばー』の大特集。むかしの人達の、旅の仕方も発見しましょう。」（伊勢・尾道・札幌・京都・萩・野沢温泉・下総中山法華経寺など）あたりから本格化――にあった[22]。「“アンアン”“ノンノ”に国内旅行の特集記事が毎号掲載されたのは、一九七二年の秋か

19）当初売上が伸びなかった『an・an』では、「それまでは外部の“タレント”に依存する部分の多かった編集方針が、ほかの部と同じように普通の社員で作って行くように変わった」という人事異動が行われ、海外よりも国内のへと目が向けられていった（三宅，1977：23)。その結果、73年には婦人雑誌が軒並み実売前年割れをおこし、「服飾誌も、読者志向の多様化や既製服の浸透普及に加え、後発の『non・no』『an・an』（いずれも月２回刊）２誌の尻上がりの好調の影響もあって、そろって落ち込んだ」(出版ニュース社編，1973：80)。中でも『non・no』は「読者対象は都会派の18～24歳の女性が中心。‥ひたすらラヴリーな女性像をイメージアップした点、『an・an』と並んで、まさに既存のパターンを破った新しいフィーリング雑誌の誕生といえる。‥年内、早くも創刊数ヵ月にして『an・an』の発行部数と背を並べるまでに上伸し、急追に成功したといわれる」(出版ニュース社，1972：79)。当時の『non・no』編集長も、編集方針は「すべての内容をファッションとして捉える」ことと語っている（塩澤，1982：227)。全国出版協会・出版科学研究所の『出版指標年報』によれば、婦人誌（95年以降女性誌）のうち月刊誌は、推定年間総発行部数で55年の3,365万冊から02年の17,239万冊まで順調に延びており、中でも「ミス」誌は、66年の607万冊から02年の12,429万冊へと急成長――一方「ミス・ミセス」誌は漸減、婦人（女性）週刊誌も微増に止まる――している。

20）前出のカミナリ族からビート族へと渡り歩いた45年生れの若者もカニ族を体験している（河出書房新社編集部，1980)。75年９月９日号『週刊プレイボーイ』の記事「ヤング・ライフの開拓者《○○族》にみる戦後30年」のカニ族の項によれば、71年に「加藤登紀子の『知床旅情』のヒットに乗って、異常な北海道ブームとなった。大きなリュックを背負って北海道を旅する若者たちのことをこう呼んだ」。またアンノン族との関連で言えば、この年小柳ルミ子「わたしの城下町」もヒットしている。

21）『an・an』の旅特集の初出は、70年７月20日号『an・an』の「ペロとサブの軽井沢」「YURI ET VERO 京都」だが、まだこの頃は外人モデルを観光地に赴かせる斬新さが狙いであった。その後71年頃から「an・an guide/shopping」というコーナーでの各地の名品・名店の紹介が始まっている。

22）『an・an』を初め平凡出版の多くの雑誌デザインに関わった堀内誠一によれば、「アンノン族なるものを最初に

ら、七八年五月（アンアン）、八〇年六月（ノンノ）までの期間である。この時期以降、旅行記事がほとんどメインテーマとして取り上げられていない、ということ自体、“旅”が一過性の、あるいは循環的な流行現象であることを示している」（原田，1984：51)。こうした旅特集のヒットは、73年に『旅にでようよ』（毎日新聞社)、74年には『るるぶ』（日本交通公社出版事業部）といった旅行専門誌を生み出し、「既存の女性教養誌・実用誌は一般に話題に乏しく、売行きも概ね横ばい状態に終始したが、ヤング層対象の『ノンノ』『アンアン』だけは傑出した部数の急伸」といった結果へと繋がっていく（出版ニュース社，1974：74)。

もちろんこのブームは、女性誌だけが起こしたものではなく、大阪万博後の旅客需要の掘り起こしを狙った、70年に始る国鉄（現 JR）の「美しい日本と私 DISCOVER JAPAN」キャンペーンに後押しされたものであった。『an・an』のモデル秋川リサを起用した周遊券などのコマーシャル――「気ままな旅のリサでございます」――が次々と作られ、また『an・an』で活躍したスタイリスト原由美子によれば「このディスカバー・ジャパンには秋川リサのほか、平凡パンチの表紙のイラストを描いた大橋歩や北山修、なかにし礼、吉田喜重なども出演している。このキャンペーンは、アンアンの旅のページの人気と重なって、全国に『アンノン族』を生みだすことになる」という[23]。前出の『an・an』「日本の旅」特集号でも、

「これからの旅はウーマン・リブで行こう！　女性のひとり旅というのは、国鉄でもポスターなんか作ってすすめているようだけど、古来よほどの事情がない限り、あり得なかったものとみえて、いまでも観光施設というのは男性用にできてるんだな！」
「言っとくけど、女のひとり旅は自殺かと思うし、酒のまんので儲けがうすいしイヤがって泊めてくれない。とくに予約してないと、ぜーんぜん。そうしたら、寺や道ばたにでも寝ればいいのだぞ。それはオーバーにしても、とにかくはらをきめなさい。泊まるとこがないくらいで死にはしない（ご両親にはこのページ見せないでくださいよ)。／暗くなってきて、お腹すいて、今夜の宿もなく、その泣きたいような気持ちは、ガッチリ予定をたてた旅行で味わえない」

と、国鉄のキャンペーンを意識しつつ、女性一人旅への誘いがアジテーションされている[24]。

ディスカヴァーされる日本

その旅の行き先として、「“アンアン”“ノンノ”が最も頻繁に取り上げた観光地は、京都である。両誌を通算して三六回といえば、京都の旅特集が各雑誌で一年に二度以上組まれている計算になる。北海道の一九回、奈良一七回、次いで鎌倉、軽井沢、金沢、神戸、津和野・萩、岩手、飛騨高山、長崎など」が好まれており、原田ひろみはその旅のカテゴリーとして「日本の伝統をたずねる旅・自然とのふれあいを求める旅・異国情緒を味わう旅」の三つを挙げている。二つ目の自然とのふれあいが、ヒッピーやカニ族のそれとはとは異なり[25]、「“北欧を思わせる景色”（北海道)、“南

定義したのは上野駅のお巡りさんで、何時だったか朝日新聞に家出娘の記事が載った時に、上野の交番の巡査が語った言葉でした。「最近は又、多くなりましたよ、勘でこの娘はそうだと解るんですが、恰好は、ほらアンアンとかいう雑誌によく出てるような服の女が居るでしょうが‥‥」」（堀内，1979：141-2)。

23) 79年5月5日号『an・an』は「さよならアンアン」と題して初期『an・an』を回顧しており、「1971年　秋川リサがアンアン調の「‥‥で～す」で CM に新風を巻き起こす」「前年から始まった国鉄のディスカバー・ジャパンの CM は、「それまでの国鉄のもつ男っぽい、ごついイメージを、明るく若々しいイメージに」（電通・小田桐昭ディレクター）変えた」とある。

24) こうした『an・an』の主張の背景には、ウーマン・リブの思潮とそれを揶揄する「リブ報道」（井上，1980）への反発があったものと思われる。

25) 72年9月20日号『an・an』の特集「目的を鞄一杯に、つめこむ、そして旅。」には、「夏休みは終わった。旅に出ようと思う。／そろそろ蟹族やディカバー・ジャパンの人たちが姿を消すころだから、こんどの旅は、なんとなく何でも見て歩くのはやめて、特別の理由がある道筋を選びたい」として、「18歳のときからちょうど半世紀、糸をくりつづけてきたお婆さんに会う」（結城)、「牛乳は、牛のお乳なんだ、ということを思い出すために旅をした」（清里)、「“こんにちは”を上手にいえなくて、京都まで修行に出かけた‥」（京都)、「贅沢な旅、ではないのです。贅沢ということを考えてみるために」（多摩）といった範例が挙げられている。

欧の港町のような”（南紀）など‥外国、とくにヨーロッパへの憧れが底流に根深くある」ことを反映しており、また「日本の伝統をたずねる」にしても、「東洋のエキゾチックな人や物を発見して歓声をあげる西洋人のそれへと微妙にスライド」しており、オリエンタリズムのまなざしを内面化させていた点で、かつて日本に渡来した西洋人の足跡を長崎・神戸などにたどる「異国情緒を味わう旅」と同型的なものであったといえよう（原田，1984：56）。

団塊の世代とされる女性たちの声を拾っていくと

「今、手もとに妹と京都・神戸旅行をした時の写真がある。観光スポットのあちこちですかした写真を撮っている。歴史の重みを感じさせる古い街並の中に最尖端ファッションの若い女の子を立たせてコントラストの面白さを狙う（あたかも“親日派”の欧米人が日本の古都を面白がっているかのような気分で)——というのが『アンアン』風だったのだけれど、私も妹もすっかりその気。『アンアン』の一ページを演じている気分である。／11月頃だったのだろうか。私も妹もVIVID森英恵のコートをはおっている。私は、妹が編んだクローシュ（まぶかにかぶる釣り鐘型の帽子）あるいはチェックのハンティングをかぶっている。妹は、ロングのウィッグでつけ毛をしている、足もとは二人ともガッチリとした5cmくらいのヒールつきの靴である。‥どうも、昔は『アンアン』風の写真を撮るために旅に出た——というフシもあるようだ」（中野，1999：182）

また、ポスト団塊とされる世代も次のように述べている。

「高校を卒業して制服を脱いだ私は、アンアン・ノンノから仕入れた情報をもとに、青山通りへベルボトムのジーパンを、また銀座のみゆき通りへアンチックプリントのスカートを買いに走った。そしてそんなファッションに身をつつみ、立て看板だけが空しく立ち並ぶ虚無的なキャンパスを闊歩した。／雑誌がでるとすぐ、友だちと顔をつき合わせては星占いを見たものだ。映画や音楽の知識も仕入れ、ロバート・レッドフォードもマイルス・デイビスも「いちご白書」もマザーグースも、アンノンで知った。「老舗のある町」「私の坂道をさがして長崎を歩く」「朝市のある町」「お寺に泊まる」‥‥美しい写真で文学散歩道やお店を紹介した記事は、いつも私を魅きつけた。／初めてのひとり旅。京都へ行った。春、渡月橋の上でなごり雪に巻かれながら、私は一種の解放感に浸っていた。長崎へ、高山へと、イラストマップを片手に市電に乗ったり、裏通りを歩いたり‥‥。“もう一人の私を探す旅”はアンノンが教科書だった。／そんなある年、京都の三年坂を下っていたら、むこうから上ってくる同じくらいの年かっこうの女性が、私と同じ雑誌を持っていた。気がつくと、まわりの女の子たちが、同じような格好で同じ店に入っていく。私はそっと雑誌をしまった」（河出書房新社編集部，1987：331）

そして送り手の側からも「読者がすぐ実行できる、すぐ買える、そういう内容で全ページが埋められた。‥毎号ここに載った商品は大変な売れ行きになるそうで、似たような品があっても、本に載ったのと同じでなければダメという。店の人たちからそんな話をきくにつけて、私はそろそろ『アンアン』に飽きていることに気づいた」と、こうした情況への危惧が示されている（三宅，1977：24）[26]。

70年代を下るにつれ、「不幸な生涯を送った昔人に自分を投影し、緑あふれる自然のなかで心安らげ、日本の心を探し求めながら自分のアイデンティティーをも求めた孤高なひとり旅。これが元祖アンノン族の旅ではなかったか。／だが、ブームというものはひとり歩きするのが常だ。‥若い女性の受け入れに慣れていない観光地は、ニーズを勘違いした施設を作る。ティーンエイジャーの雑誌も、カップルでのラブラブ旅行をあおる。そして、「ネクラ」という言葉の流行とともに元祖アンノン族は行き場を失っていく」といった事態が進んでいく（97年10月22日号『毎日グラフ・ア

26）73年12月号『宝島』「an・an、non・noの京都なんて、どこにあるのだろう！？」では、旅のロマンティシズムとコマーシャルの結託が指摘されている。

ミューズ』「再訪アンノン族の旅　思い出散歩」)[27]。

79年5月1日付朝日新聞記事「「アンノン族」まばら　若い女性鎌倉・京都にソッポ」によれば[28]、

「「さらばアンノン族ですよ」と雑誌「アンアン」の甘糟章編集長はいう。‥創刊の四十五年は、ファッションでは「既製服時代」の幕あけ、旅では国鉄の「ディスカバージャパン」が始まった年。高度成長のさなかだけに、若者たちは買いまくり、遊びまくった。ミニ全盛、秘境ブームも、一つの流行が多くの人を支配できたこの時代の特徴をよく示している。／不況が始まった四十九年、「アンアン」は最盛期を迎えた。五十万部が発売三日で売り切れ、毎号四、五千通のファンレターが舞い込んだ。ロングスカートと「古都」「城下町」ブームの時代。京都、鎌倉、飛騨高山の特集を年に各三回ずつ組んでもなお売れた。／不況の影響は五十一年ごろから現れ出した。流行の支配力が落ち、「みんながてんでに好きな格好をし始めた」という。以来、ファッション界では「圧倒的な流行」は現れない。二、三年遅れで、旅にも、いまその傾向が浮かび始めたのではないか、と甘糟さんは「旅の個性化」を見る」

そして80年代に入ると、「マスコミも近頃さすがにアキちゃったのか「アンノン族」と騒ぎたてないが、このテの女の子はまだまだサイレント・マジョリティとして存在しているはずだ」(82年7月25日号『HotDogPress』)と語られるようになり、ブームは終息していった。

ジェンダー・トラブルか、従順な消費者か

では、アンノン族とは一体何だったのだろうか。甘糟の言うように、ファッションや観光など、レジャーおよび消費の主体として、女子大生やOLたちが立ち現れてきた現象であったことは確かだろう（土方，1989)。編集者の一人も次のように回顧している。「原宿などにブチックが乱立、日本中のメーカーが大小ブランドを乱発、そして若い女の子たちが“お店”とか“ショッピング”に異常な関心を持ち始め、“おしゃれ”と“ファッション”が女の子の大きなテーマになってくる。／『アンアン』や『ノンノ』がその風潮を作ったのではなく、むしろ繊維業界や商社の政策によって、そんな時代が作られていったのではないか。『アンアン』の広告ページがどんどんふえて、雑誌の販売は赤字でも、全体としては大幅な黒字という結果も、既製服時代が反映しているようだ」(三宅，1977：23)。

これら女性誌による旅特集も、結局は旅先での消費への誘いであり、アメリカの匂いのする「エキゾチック」な街原宿でのショッピングであったりもした[29]。「原宿が《若者文化の街》として全国的に知れ渡ったのは、日本でファッション雑誌が誕生した70年代初頭。その代表格である『アンアン』の特集「東京の街で外国を発見した原宿物語」で、全国にセンセーショナルなデビューを飾った」。そして、その原宿のトレンドは「『原宿族』に変わって『アンノン族』と呼ばれる『アンアン』『ノンノ』志向の女性達がリードし始める。当時の彼女達のファッションの主流は、「ジーンズ・ブーム」と「アンノン・ファッション」であった。さっそうと歩く彼女達を称して「雑誌から抜け出たような‥」という文句がホメ

27）同特集では軽井沢・清里・京都・高山・萩津和野が再訪され、「アンノン族ブームと京都観光のかかわりは立派に存在する。女性誌は京都特集で部数を伸ばし、1974年にはノンノの特集で年間4回も登場。一部の文化人や歴史愛好家、修学旅行生が訪れていた京都の地に、若い女性たちがどっと押し寄せた。当時の観光統計資料を見ると、20代の女性が主たる観光客になったことがよくわかる」という。また79年5月27日号『週刊読売』は『an・an』の新創刊を取り上げ、「雑誌を小脇に、京都や鎌倉の街筋に群れるといった風俗は、すでに語り草」と評している。

28）75年3月19日付朝日新聞「流行にソッポが流行」でも、圧倒的な流行の消失が指摘されている。また、86年12月4日付朝日新聞「今日の問題　新アンノン族」は、「今年の出版界で、写真週刊誌の五誌競争と並ぶ大きな話題として、男性ファッション誌の相次ぐ登場がある。別冊も加えると十誌を超える」と、男性のアンノン族化を憂いている。

29）63年まで現代々木公園には米軍将校のための「ワシントンハイツ」があり、キディランドは50年に進駐軍向けの書籍や生活雑貨、本国へのお土産品を売る店としてオープンした（隠田表参道町会，1994)。

言葉になったのも、この頃である」(隠田表参道町会，1994：80−2)。

うらべまことは、68年から71年までを「ヤング・マーケット繁盛期」と呼び、その原動力としていわゆるマンション・メーカー——数人の仲間で趣味的な服を小ロットで作っていく——の存在を指摘したが、そのマンション・メーカーが集積していたのが当時の原宿であった(うらべ，1982)。こうしたヤング・マーケットの中心にあったのがアンノン族であり、三浦展の調査によれば「『アンアン』『ノンノ』を両方読んでいた女性は全体の22％であるのに対して、短大・大学卒の女性では32％、高校・専門学校卒の女性では7.5％であった。‥つまり、『アンアン』『ノンノ』を片手に、ショッピングをしたり、旅行に行ったりしたアンノン族は、団塊世代の中では、短大、大学に進んだ、一部の恵まれた女性だけだったのだ」(http://www.culturestudies.com/baby_boomers/baby_boomers13.html)。

しかし、アンノン族を各種文化産業のマーケットとしてのみとらえるべきではあるまい。72年発足の「中ピ連」とは比較にならないかもしれないが、「70年代始めといえば、独身女性が一人で泊まりがけの旅行に出るなんて、もってのほか」という時代に、一人で、ないしは旅先で知り合った同性の友人と旅を続ける姿は、一種の「ジェンダー・トラブル」であった[30]。また70年代の『an・an』において多くの頁を割かれていた読者の交流コーナー「アンアンミニコミ」の盛り上がりは、対抗文化やウーマン・リブが生み出した「ミニコミ」以上に、同世代の若者を媒介するメディアとして機能していた。フーテン族、ヒッピー・ムーヴメント、学生運動、反戦運動、女性解放運動などにコミットできない層までもが、若者ないしヤングとして、時代の主役という意識・感覚を分有しえたのは、雑誌などのよりミディアムなマスメディアによるところが大であった[31]。

「女性雑誌文化は、あえていうなら、私たちの世代とともに成長し、変容してきた。それ以前の年齢に応じた女性誌の区分けは、私たちの世代には無効で、読者の変容に合わせて、雑誌のほうが変身してこなければならなかったのである。しかも私たちは、雑誌と縁の切れない生活を送っている。／ところで、なぜ、「雑誌」なのか？‥第一に、共同体的規範から切れたところで育ってきた私たち団塊(マス)の世代は、互いのコミュニケーションにマス媒体(メディア)を要請するほかなかった、という事情がある。私たちは深夜放送で同世代の動向を知り、『ぴあ』で同世代と出会う場所へおもむいた」(上野，1984：82)

雑誌によって完全に仕掛けられるのではなく、ある部分で雑誌を読者間のメディアへと変容させ、雑誌の主張を自らの側に取り込むとともに、自身たちの感覚を誌面へと反映させていく。そうしたプロセスを通じて、何らかの主体として構成されるのみではなく、自らを何者かに構成していく体験の喜びは、それまでのラディカルズや対抗文化が提供し得ないところであった。「アンノン族はなるほど画一的な行動パターンをとってはいたが、それはファッションを単なる外見とする二元論をつき崩すキッカケとなったのである。というのは、彼女らは衣服だけでなくレジャー・遊びも含めた暮らしのファッション化を求めたからだ。彼女らにとってファッションはライフスタイルの最も有効な表現手段になったのである」(84年7月号『アクロス』「現代若者論—のり子とサ

30) 前出「再訪アンノン族の旅　思い出散歩」を取材した記者が、「嵐山レディースホテル」を取り上げたコラムによれば、「ホテルの社長によれば、一人旅の女性は相部屋を好んだそうです。旅先で通りすがりの出会いを楽しみ、お互いに恋や人生の悩みを打ち明けあい、翌日には仲良く嵯峨野一帯を散策していくのが常だった」という(http://www.onfield.net/column/020601/shuzai.html)。また山根一眞によれば、いわゆる「まる文字」流行の背景には、『an・an』で多用された書体ナールの影響力があるという(山根，1986)。こうした若い女性間だけでの筆記法の共有も、規範からの離脱と言えよう。

31) 77年に創刊された『クロワッサン』(平凡出版)は、『an・an』卒業生のためのものであり、上野千鶴子によれば団塊世代の平均初婚年齢は24才で、「七四年にインテリア特集に専門化した『セゾン・ド・ノンノ』(集英社)が出る。女たちは巣づくりに関心を持ちはじめ、「ニューファミリー」をつくりはじめる。／団塊の世代は、親たちの世代に反抗したほどには、自分たちの結婚と家庭づくりには革新的ではなかった」(上野，1984：81)。

メ男の時代」)[32]。<若者文化>を無害化し、普通名詞の若者文化へと拡散させつつも、彼女たちはファッションという自己主張の回路を持ち始めた。既成のメディアに頼り、それに指示された空間に赴いたにせよ、ある階層の若い女性に課せられていた常識に違背し、同世代の同性との連帯を求め、女性の存在を欠落させてきた<若者文化>に密かに異を唱えたのである。

【小括】

本稿ではいわゆる団塊の世代を中心とした二つのYSを概観した。そこに共通しているのは、単にそれらをモラル・パニック視するだけではないマスメディアの新たな動きであり、特に若者向けメディアが、それらを加速し、時にはそれらの母体となるような事態であった。またこれらは、それまでのあからさまな反抗にもとづく男性中心的なYSとも異なっていた。もちろん、この二つのYSは高度経済成長や消費社会の産物であり、そこに寄生しただけだともいえよう。しかし、若者たちのアイデンティティの源泉が、メディアや消費との関わり方、ないしはそれらとの距離のとり方に求められざるを得なくなった情況下での新しい試みとして、また「かつて受容されていた、文化における“サブ”と“支配的（dominant）”の区別は、いわゆる支配的文化がライフ・スタイルの感受性や嗜好の多元性へと細分化された世界においては、もはや正当であるとはいえない」（Cantey，2004：47）といった動向が、一気に顕在化する80年代以降の先取りとして、両YSを位置づけることも可能だろう。現に、フーテン族のようにストリートに無為にたたずみ続けるYSは、90年代に再度注目を集めることになり、またいわゆるカタログ雑誌を介したYSのあり方は、その後もポパイ少年・JJガール・オリーブ少女・Hanako族と再生産され続けている。アンダーグラウンドな、異議申し立て（dissent）や新たな選択肢（alternative）である<若者文化>が終焉したとしても、若者たちの自らの文化（a way of life）への希求は依然続いていくのである。

参考・引用文献

アクロス編集室編　1995『ストリートファッション1945−1995』PARCO出版
足立正生　2003『映画／革命』河出書房新社
赤塚行雄　1969『ゲバ・アン語典』自由国民社
天野正子編　2001『団塊世代・新論』有信堂
新井克弥　2000『バックパッカーズ・タウン　カオサン探検』双葉社
Chaney, David 2004 ‘Fragmented Culture and Subculture’, Bennet, A. & Kahn-Harris, K.（eds.）“After Subculture” Palgrave
藤巻智美　1979「一九七〇年のまぼろしの『アンアン』へ」『宝島』7−2（62）
深作光貞　1968『新宿孝現学』角川書店
月刊アクロス編集室　1989『大いなる迷走：団塊世代さまよいの歴史と現在』PARCO出版局
郷古英男　1978「有機溶剤乱用について」『犯罪社会学研究』3
浜野安宏　1970『ファッション化社会』ビジネス社
　1974『ファッション都市論　人があつまる』講談社
原田ひとみ　1984「“アンアン”“ノンノ”の旅情報」『地理』29−12
早坂泰次郎　1967『世代論』日本YMCA同盟出版部
土方苑子　1989「女性と教育」マーサ・N・オザワほか編『女性のライフサイクル』東京大学出版会
平野秀秋　1985「対抗文化の本質と現実」『青年心理：若者昭和史』53
堀内誠一　1979『父の時代・私の時代：わがエディトリアルデザイン史』日本エディタースクール出版部
井上輝子　1980『女性学とその周辺』勁草書房
石川弘義ほか監修　1981『アメリカンカルチャー②60’s』三省堂
岩田薫　1981「ミニコミの中の若者文化」『青年心理』25
加賀乙彦　1974『現代若者気質』講談社現代新書
金坂健二　1971『幻覚の共和国』晶文社
河出書房新社編集部編　1979『わが世代　昭和三十一年生まれ』河出書房新社
　1980『わが世代　昭和二十年生まれ』河出書房新社
　1981『わが世代　昭和二十六年生まれ』河出書房新社
　1987『わが世代　昭和二十九年生まれ』河出書房新社

32）また中野翠も「ところが、『アンアン』は完全に既製品の服が中心だった。しかも、服そのものではなくて、服と服、服と小物、さらにその背景（インテリア、雑貨、街並）などの組み合わせ＝コーディネイトの面白さに力点を置いて見せている感じなのが、新鮮だった」と回顧している（中野，1999：158）。

香山リカ 1991「オリーブ少女の欲望のありか」大塚英志編『少女雑誌論』東京書籍
君塚太 2004『原宿セントラルアパートを歩く』河出書房新社
小出鐸男 1988「出版業と産業化の実証研究(三)：雑誌広告収入の変遷について」『出版研究』19
今防人 1987a『コミューンを生きる若者たち』新曜社
1987b「対抗文化から日常生活へ」栗原彬・庄司興吉編『社会運動と文化形成』東京大学出版会
楠しずよ 1989「体験的東京ファッション年表」『別冊宝島87：ファッション狂騒曲』JICC 出版局
倉沢進・浅川達人編 2004『新編東京圏の社会地図 1975-90』東京大学出版会
馬渕公介 1989『「族」たちの戦後史』三省堂
マガジンハウス編 1985『創造の四十年』マガジンハウス
松原惇子 1988『クロワッサン症候群』文藝春秋
松本良夫 1978「最近の東京における少年非行の生態学的構造」『犯罪社会学研究』3
森昭道 1969「フォークソングと若い世代」『月刊労働問題』137
三浦展 1997「新 TOKYO 地理学⑨喫茶店」『東京人』12-10（121）
三宅菊子 1977「『アンアン』と過ごした六年あまり」『総合ジャーナリズム研究』81
1985『セツ学校の不良少年少女たち』じゃこめてぃ出版
永島慎二 1988『フーテン（全)』ちくま文庫
中野翠 1999『お洋服クロニクル』中央公論新社
難波功士 2004「戦後ユース・サブカルチャーズについて（1)」『関西学院大学社会学部紀要』96
奥村隆 1994「階級社会の再生産における「文化」の二つの様態」, 庄司興吉編『再生産と自己変革』法政大学出版局
隠田表参道町会 1994『原宿：1995』隠田表参道町会
大島渚 2004『大島渚1968』青土社
Reich, Charles 1970 “The Greening of America”,＝1971 邦高忠二訳『緑色革命』早川書房
Roszak, Theodore 1968 “The Making of a Counter Culture”＝1972 稲見芳勝・風間禎三郎訳『対抗文化の思想：若者は何を創りだすか』ダイヤモンド社
坂本佳鶴恵 2000「女性雑誌の歴史分析」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53
産経新聞社編 1970『新しい青年像を探る』光風社書店
佐藤嘉昭 1997『若者文化史』源流社
清水達夫 1985『二人で一人の物語：マガジンハウスの雑誌づくり』出版ニュース社
塩澤実信 1982『雑誌をつくった編集者たち』廣松書店
「草月アートセンターの記録」刊行委員会 2002『輝け60年代』フィルムアート社
砂田一郎 1975「ヒッピーは風俗だったか」『思想の科学』258
出版ニュース社編 1960『出版年鑑 1960年版』出版ニュース社
1971『出版年鑑 1971年版』出版ニュース社
1972『出版年鑑 1972年版』出版ニュース社
1973『出版年鑑 1973年版』出版ニュース社
1974『出版年鑑 1974年版』出版ニュース社
舘稔編 1961『日本の人口移動』古今書院
高田昭彦 1978「対抗文化序論：対抗文化の世界と社会学の接点」『成蹊大学部学部紀要』14
高橋徹 1974「「アングラ新聞」の構造と機能」東京大学新聞研究所編『コミュニケーション：行動と様式』東京大学出版会
高橋勇悦 1995『東京人の研究』恒星社厚生閣
竹下俊郎ほか 1978「生活ファッション誌の「利用と満足」研究」『新聞研究』322
東洋経済新報社編 1985『国勢調査集大成人口統計総覧』東洋経済新報社
内田栄一 1969『ティーチイン騒乱の青春』三一書房
上野千鶴子 1984「女性誌ニュージャーナリズムの同世代史」『朝日ジャーナル』26-48（1347）
上野昂志 2004「1967年、新宿は熱かった。」『東京人』19-10（207）
うらべまこと 1982『続・流行うらがえ史』文化出版局
渡辺潤 1982『ライフスタイルの社会学：対抗文化の行方』世界思想社
渡辺潤ほか 1981『生きるためのメディア図鑑』技術と人間
渡辺克巳 1997『新宿：1965-97』新潮社
山田塊也 1990『アイ・アム・ヒッピー：日本のヒッピー・ムーヴメント’60-’90』第三書館
2001『トワイライト・フリークス：黄昏の対抗文化人たち』ビレッジプレス
山根一眞 1986『変体少女文字の研究』講談社
山下悦子 1992『さよなら Hanako 族』KK ベストセラーズ
四方田犬彦 2004『ハイスクール1968』新潮社
吉見俊哉 1987『都市のドラマトゥルギー』弘文堂

Concerning Youth Subcultures in the Postwar Era Vol. 2: From Futen-zoku to Annon-zoku

ABSTRACT

'Futen-zoku (The Vagabond Tribe)' emerged in the summer of 1967. They gathered the small park in front of the east gate of Shinjuku station. They called it 'Green House'. In the 1960s, Shinjuku was the hottest venue for the youth and there were many spots where events of avant-garde, underground or alternative culture were occurred and performed. Futen-zoku stayed there without doing anything all day long and sometime they indulged themselves in using drugs or chemicals, e.g. thinner, glue and sleeping pill. They wore eccentric clothing. The mass media took them up in a 'moral panic', because of their license, idleness and neglect of orthodox gender roles. However, they didn't have any firm belief or cause or their own media. So, they disappeared the following year and their subcultural values were taken over by other youth subcultures. Futen-zoku belonged to Dankai-no-Sedai (the Japanese Babyboomer generation), and their social class backgrounds were not so low.

'Annon-Zoku' (whose members intensively read the women's magazines, "an・an" and "non・no") was born in 1972. It was the first youth subculture of which members were mainly young women. Led by articles of those magazines, they took trips to historic cities (Kyoto, Kamakura etc.), scenic locales (Karuizawa, Hokkaido etc.) or exotic towns where Western people have lived since olden times (Nagasaki, Kobe etc.). They were usually college students or office workers (OL, in Japanese). So, their social class backgrounds were also not so low, and they belonged to the Dankai or post-Dankai generation. In the early 1970s, a girl from middle or upper class family wasn't permitted to take a trip by herself yet. 'Annon-Zoku' did not represent deviance, but created certain 'gender trouble' under the circumstances of the 1970s. They were sneered at because of their uniformity or vulnerability to the influence of the media. However, they reflected the atmosphere of the 'Women's Lib' period, too.

These two youth subcultures were considered to be consumption-oriented or superfluities of affluent society. However, they were important as the heralds of youth culture in the 1980s and 1990s.

Key Words: youth subcultures, Futen-zoku, Annon-zoku